

KJ法を利用したパラグラフの作り方の指導 —KJ法で編成した小グループとパラグラフの共通性を利用して—

橋本 泰央、大野 均、佐藤 良太、上村 知弘、川崎 一郎

A KJ method is useful to teach the structure of a paragraph

Yasuhiro HASHIMOTO, Hitoshi OHNO, Ryota SATO, Tomohiro KAMIMURA, Ichiro KAWASAKI

要約

パラグラフとKJ法で編成した小グループの間の共通性を指摘し、パラグラフの構造を持った文章の書き方を学生に指導する際にKJ法を用いた筆者の実践を紹介した。KJ法を用いて編成した小グループを文章化することで、学生はパラグラフ構造をもった文章を書くことができた。また文章を書く際にKJ法を用いて情報を整理することで、文章が書きやすくなる効果もあった。その理由としては小グループを編成することで書くべき内容が明確になったこと、およびグループ編成をする過程で行われた話し合いにより、各自の理解が深まり、情報の整理がなされたことが考えられた。

1 はじめに

パラグラフは論理的文章を構成する文章単位である。倉島(2012)によれば欧米ではパラグラフを使って論理的文章を書くのが標準だという。学生向けの学術的文章の書き方のテキストではパラグラフの書き方に多くのページを割いている(倉島, 2012)。

日本ではパラグラフは「段落」と訳されることが多い。広辞苑第6版にも「文章上の節。段落。」とある。段落は「長い文章中の大きな切れ目」である。段落の概念はパラグラフのそれに似ている。しかし段落の構造に明確な決まりがないのに対し、パラグラフは本稿で述べるように明確な構造を持っている。

学生にパラグラフの概念を教える際にKJ法の利用を試みたので、以下に報告する。

2 目的

本稿の目的は2つある。1つはパラグラフとKJ法で編成した小グループの間の共通性を指摘することである。もう1つはパラグラフの構造を学生に教える際にKJ法を用いた筆者の実践を紹介することである。

3 パラグラフとKJ法

(1) パラグラフ

パラグラフは「ひとつの考えでまとめられた、(ふ

つう)ふたつ以上の文章集合」のことである(澤田, 1983)。1つのパラグラフは通常3から10くらいの文章で構成される。パラグラフの長さには決まりはない。またパラグラフを構成する文章の数にも決まりはない。しかし、パラグラフを構成するすべての文章が「ひとつの考えでまとめ」られていることが重要である。

パラグラフの内容を規定している「ひとつの考え」はトピック・センテンスによって表明される。トピック・センテンスは、題目文とも(澤田, 1983)、要約文とも(倉島, 2012)呼ばれる。ひとつのパラグラフが表明する1つの考えを1文で表明したものがトピック・センテンスである。パラグラフ内のすべての文章は、このトピック・センテンスの思想とつながりをもっていないとてはならない(澤田, 1983)。

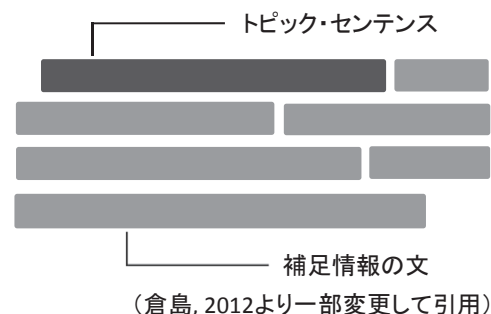


Figure 1 パラグラフの構造

1つのトピック・センテンスと、トピック・センテンスの内容を補足する複数の文からなる。トピック・センテンスは通常パラグラフの冒頭に置かれることが多い。

1つのパラグラフは1つのトピック・センテンスを含む (Figure 1)。トピック・センテンス以外の、パラグラフを構成するすべての文章は、トピック・センテンスが表明する思想の説明に寄与するものでなくてはならない。つまりそれらの文章はトピック・センテンスの内容を補足し、より詳しく説明する文章でなくてはならない。これらの文章を補足情報の文と呼ぶならば、1つのパラグラフは1つのトピック・センテンスと複数の補足情報の文で構成される (倉島, 2012)。トピック・センテンスはパラグラフの冒頭に置かれることが通常である。

(2) 良いパラグラフを書くための条件

良いパラグラフを書くための条件が3つある。1つ目の条件はトピック・センテンスによってパラグラフ内容が統一されていることである。2つ目の条件はパラグラフの連関性が確保されていることである。3つ目の条件はパラグラフ内の展開がなされていることである (澤田, 1983)。1つ目のトピック・センテンスによるパラグラフ内容の統一については前述した通りである。よって残りの2つについて以下で説明を加える。

パラグラフの連関性には2つの意味がある。1つはパラグラフ内の文章同士のつながり、もう1つはパラグラフ同士のつながりである。

パラグラフの連関性を確保するためには文章同士、パラグラフ同士の関係を明確にして、適切な順番に並べなくてはならない。文章同士の連関性を確保する方法として澤田 (1984) は9つの方法を挙げている。この方法は文章同士の連関性だけでなく、パラグラフ同士の連関性を確保するためにも有用である。その9つの方法とは以下の通りである。文章を①時間的順序に従って並べる、②空間的順序に従って並べる、③重要さの順序に従って並べる、④既知のものから未知のものへと並べる、⑤一般的なものから特殊なものへと演繹的順序に従って並べる、⑥特殊なものから一般的なものへと機能的順序に従って並べる、⑦同様な考え、または同一ないし同類語の繰り返し、⑧対応均衡構造によるつなぎ¹を用いて並べる、⑨接続語を用いてつなげる (p.117)。

パラグラフ内の展開がなされているとは、補足情報の文が十分にトピック・センテンスを肉づけするものになっていることを指す。展開のための手段としてはさまざまなデータや具体的な事例を用いる方法があ

る。また実験や調査を行ったり、統計的な証明を行ったり、帰納、演繹、因果関係による証明を用いることも有効である。トピック・センテンスが持つ思想の信頼性を確保するために、必要かつ十分な展開を心がけなくてはならない (澤田, 1984)。

つまりトピック・センテンスによってパラグラフ内容が統一されており、文章同士およびパラグラフ同士のつながりが自然で、必要かつ十分な展開がなされているパラグラフが良いパラグラフである。

(3) KJ法

KJ法は川喜田二郎が「野外で観察した複雑多様なデータを、『データそれ自体に語らしめつつ、いかにして啓発的にまとめたらいいか』という課題」から案出した発想法である (川喜田, 2014)。

KJ法を行う前に、手元にある情報をカード (紙片) に書き写す必要がある。書き写す情報は観察したデータやブレインストーミングで出た様々な意見を簡潔な言葉でまとめたものである。

カードができたらずべてのカード同士が重ならないように並べる。次いでカード全体を眺め、カードに書かれている情報の内容から親近感を覚えるカード同士を1か所に集める。こうしてできたカード同士の集まりを小チームといい、小チームを作る過程を小チームの編成という。このようにしていくつかの小チームを編成する。

小チームが編成されたら、小チームを編成しているカードの内容をよく読んで、カードの内容をよく表現し得る1行見出しを考える。考えた1行見出しは別の紙片に書いて、表札として小チームの上ののせておく。この作業を編成したすべての小チームに対して行う。

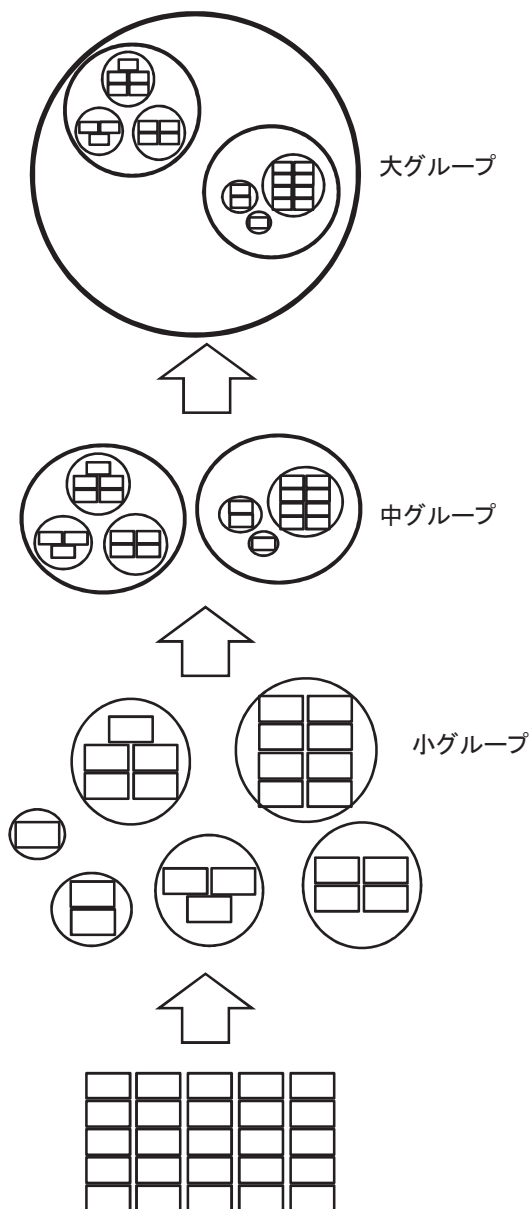
表札作りがすべての小チームに対して終わったら、同じ手続きを用いて小チームから中チーム、さらに大チームを編成する。編成したチームに名前を付け、紙片に書いて各チームの上ののせておく。編成された大チームをすべて包括する表札はデータを集めた際のテーマ、あるいはブレインストーミングを行った際の主題になっている。以上の手続きをグループ編成と呼ぶ (Figure 2)。

グループ編成の後に行う作業は2種類ある。1つはグループ編成したものを図解する作業、もう1つは図解したものを文章化する作業である。以下に図解する作業と文章化する作業の手順を記す。

図解は以下の手順で行う。まず編成が済んだチーム

をもう一度並べて、内容（表札）をよく読む。次いでチーム（もしくはチームを構成する、より小さなチーム）の最も論理的な並べ方を考える。チーム同士の空間的配置を考えることで、チーム同士の関係性が持つ意味を明らかにするのである。空間的に意味のある配置を見出すことを空間配置と呼ぶ。空間配置ができれば、チーム同士の関係性が持つ意味を矢印などの記号で表しつつ、空間配置を大きな紙に図解する。

図解をもとに文章化をする。その際、どこの部分から文章化するかについての決まりはない。しかし文章



（川喜田, 2014 より一部変更して引用）

Figure 2 KJ法によるグループ編成

内容の似たカード同士を集めて小グループを編成する。何らかのつながりがみられる複数の小グループが集めて中グループを編成し、さらに複数の中グループを集めて大グループを編成する。

化を始めたら「図解上隣接的な近さにある情報の処理へと文章化を進めた方がよい」（川喜田, 2014）。また、文章化にあたっては「叙述と解釈とを区別すること」（川喜田, 2014）が重要である。

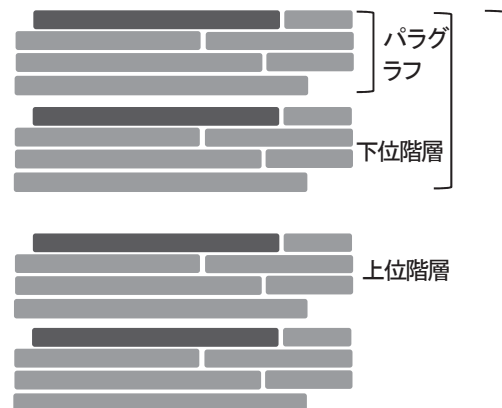
文章化をする過程で、カードの解釈あるいはグループ間の解釈についての新たなヒントが生じてくる。こうして生まれた新たなヒント同士がお互いに干渉し発展した結果として仮説が自然に発生することがある。以上がKJ法の流れである²。

（4）パラグラフとKJ法で編成した小グループの共通性

パラグラフとKJ法で編成した小グループ（以下、小グループとする）の間には2つの共通点がある。

1つ目の共通点は1つのパラグラフ、もしくは1つの小グループは1つ内容を表している、という点である。前述したように1つのパラグラフは1つのトピック・センテンスと、そのトピック・センテンスを補足、説明する複数の文で構成される。トピック・センテンスはパラグラフで表明する考えを一文で言い表したものである。一方小グループは内容に親和性を持った複数枚のカードと、それらを一言で言い表す一行見出し（表札）からなる。パラグラフは文章で構成され、小グループはカード（に書かれた簡潔な言葉）で構成されるという違いはあるが、構成する文章、もしくはカードに書かれた簡潔な言葉が内容的に1つのまとまりをなす、という意味で共通している。

2つ目の共通点はパラグラフと小グループは内容的に1つのまとまりをなす最小単位だという点である。



（倉島, 2012より一部変更して引用）

Figure 3 文章の階層構造

複数のパラグラフが集まって下位階層を構成する。下位階層が複数集まって上位階層を構成し、上位階層が複数集まって文章を構成する。

パラグラフと小グループはそれぞれ複数集まって、より大きなまとまりを構成する。例えばパラグラフは複数集まって階層を構成する (Figure 3)。階層が集まって文章が構成される。つまりパラグラフは文章を構成する際の、内容的に1つのまとまりをなす最小単位である³。一方小グループは複数集まって中グループを構成する。さらに中グループが複数集まって大グループを構成し、すべての大グループが集まって主題 (カードに情報を書き込んだ際のテーマ) を構成する。つまり小グループは主題を構成する、内容的に1つのまとまりをなす最小単位といえる。このようにパラグラフと小グループは、より上位の階層 (グループ) を構成する最小単位である。

以上のように、パラグラフと小グループの間には2つの共通点がある。1つ目の共通点はパラグラフと小グループが内容的に1つのまとまりを構成する、という点である。2つ目の共通点はパラグラフと小グループがより上位の階層 (グループ) を構成する最小単位である、という点である。

上記の共通点から、パラグラフという概念を学生に教えるための方法として、KJ法を用いることが有用であると考えた。今回実践の機会を得たので、以下で報告する。

4 実践の紹介

(1) 対象

本実践の対象は本学科の1年生昼間部53名であった。パーソナル・コミュニケーションという授業の2回分を実践に当てた。

(2) 方法

1回目の授業では材料収集およびグループ化の作業を行った。材料収集の際のキーワードは「帝京短期大学」とした。全員に共通するテーマだからである。1回目の授業の流れは以下の通りであった。

①各自が「帝京短期大学」というキーワードで思いついたことを付箋に書き出す。その際、書き出すことは何でも良い。ただし、1つの付箋には1つのことだけを書くことと、文章で書かずに一語で書くことの2点を指導した。

②次に5、6人からなる班を編成した。以降の作業はこの班単位で行った。

③班のメンバーが書いたすべての付箋をメンバー全員

が見えるように机の上に並べた。

④メンバー各自が付箋に書いた言葉の意味を順番に説明した⁴。

⑤内容の似た付箋同士を集めて、これを小グループとした。どの付箋とも内容が異なる付箋は無理に小グループに入れずに、そのまま置いておいた。

⑥小グループを構成する付箋の中身をよく読んで、小グループに名前を付けた。付けた名前は別の付箋に書いて、どこのグループの名前か分かるように小グループの近くに貼り付けた。

⑦小グループ同士の中身を見比べて、さらに上位の概念で括ることができそうな小グループ同士を近くに集めて中グループとした。編成した中グループには名前を付けて、付箋に名前を書いて中グループの近くに貼り付けた。

⑧⑦と同じ手順で、大グループが編成できる場合は編成し、名前を付け、付箋に書いて大グループの近くに貼り付けた。

⑨A3のコピー用紙に編成したグループ同士の関係を図解した。

1回目の授業はここまでとし、文章化の作業は2回目の授業で行った。

2回目の授業は1週間後の同じ時間に行った。1回目の授業で編成した小グループ、中グループを利用して、パラグラフを書くことが2回目の授業の目的であった。

文章化の作業に入る前に、班全員で小グループ、中グループ、大グループを構成する付箋の中身と各グループの名前を確認した。確認した後に以下の作業に移った。以下の作業は班単位ではなく、個人で行った。

まず小グループの中から2つ、題材として使う小グループを各自が選んだ。その2つは同じ中グループに属することが望ましいが、今回はこだわらなくてもよいこととした。

次いで各パラグラフを構成するトピック・センテンスと補足情報の文を作成した。トピック・センテンスの作成には小グループに付けた名前を利用した。そして小グループを構成する付箋に書かれた言葉を文章に直して、トピック・センテンスを支える補足情報の文とした。こうして作成したトピック・センテンスと補足情報の文を用いて文章を書くように指示した。

(3) 結果

2回目の授業内で学生が書いた文章の1例を以下に

示す。

帝京短期大学にはTJCカードがある。このカードは帝京短期大学に通っている人しかもらえない。さらに、商店街のTJCという黄色のシールがはってある店しか使うことができない。さらに、お会計1回につき1枚までしか使うことができない。TJC1枚は二百円分と決まっている。

2回目の授業終了後に書かせたリアクションペーパーにはKJ法で項目をグループ化することで、文章を書きやすかったという声があった。また、付箋に同じ言葉を書いたにもかかわらず、意味するところが各自で違うことに驚いた、という感想もみられた。

(4) 考察

まず上記で挙げた学生の文章を評価する。

この文章はパラグラフ構造になっているだろうか。筆者はパラグラフ構造になっていると考える。理由は以下の2点である。

学生の文章がパラグラフ構造になっていると考える1つ目の理由は、学生の文章がトピック・センテンスと、数文からなる補足情報の文から構成されているからである。この文章は5つの文から構成されている。1文目は「帝京短期大学にはTJCカード⁵がある。」という文である。これがトピック・センテンスである。残りの4文で1文目に出てきたTJCカードのことを説明している。これらが補足情報の文である。つまり、この学生の文章はパラグラフを構成する要素であるトピック・センテンスと補足情報の文を兼ね備えていることから、パラグラフ構造になっていると考えられる。

2つ目の理由はこの文章がトピック・センテンスで述べた内容から逸脱する内容を含んでいないからである。補足情報の文が1文目を説明することに徹しており、他の話題が入り込んでいない。つまり、トピック・センテンスによって文章の内容が統一されていると言える。このトピック・センテンスによる内容の統一はパラグラフの特徴の1つである。

以上の2点から、上記の学生の文章はパラグラフの構造になっていると言える。このことからKJ法を用いたパラグラフ構成の試みはある程度成功したと言えるだろう。

次に学生が書いたリアクションペーパーの内容について考察を行う。

リアクションペーパーにはKJ法で編成した小グループをもとに文章を書くと、文章が書きやすいという声が多かった。KJ法で編成した小グループをもとに文章を書く場合に文章を書きやすく感じる理由としては以下の2点が考えられる。

1つ目の理由は書くべき内容が明確だからである。近田(2013)は大学新入生に対して行った渡辺・島田(2010)の論文の結果から、大学生は「何を書いたらよいのか」「筋書きをどのように組み立てればよいのか」という点に対して多くの労力や時間を費やしていると考察している。今回の授業では1つの小グループから1パラグラフを構成させたため、学生は小グループを構成している数枚のカードを材料として文章を書けばよかった。つまり、何を書けばよいかという悩みを感じずに済んだことが、文章を書きやすいという学生の感想につながったと考えられる。

2つ目の理由はメンバー間の話し合いを通して、各自が頭を整理することができたからである。まずグループ編成をする前に自分が書いたカードの内容を説明することで、自分の頭の中を整理することができる。次に、メンバーの説明を聞くことで、自分にはない見方を獲得することもできる。またグループ編成することで小グループを構成するカード同士のつながりや小グループの意味を明確に捉えることができる。これらの話し合いを通して各自がカードの内容について理解を深め、頭を整理することができたことが、書きやすさにつながったと考えられる。

以上のように、KJ法を用いて編成した1つの小グループから1つのパラグラフを書く試みはある程度成功したと言える。また学生が書いたリアクションペーパーによれば、KJ法を用いて小グループを編成することで書くべき内容が明確になり、文章を書きやすくなるという効果が考えられた。さらにKJ法の作業に含まれるさまざまな話し合いが、各自の頭を整理する助けとなる、という効果も明らかとなった。

その一方で指導に際して大きな課題も残った。パラグラフ間の関連性の確保を指導できなかった点である。パラグラフ間の関連性を確保するためには、2つのパラグラフ間の論理関係を明確にしなくてはならない。2つのパラグラフ間の論理関係を明確にする作業は、KJ法では小グループ同士をまとめて中グループを編成する作業に相当する。つまり中グループを編成して、編成した中グループを構成する小グループ同士がどのような関係で結びついているかを明確にしなく

てはならない。この作業は授業で編成した班の多くが苦勞していた作業であった。著者も小グループさえ編成できれば今回はそれでよしとし、積極的な指導を行わなかった。結果として学生が書いた2つのパラグラフのほとんどは、明確なつながりを欠いた、独立したパラグラフとなってしまった。

パラグラフ間の連関性を確保する方法としては次の2点が考えられる。

1つは中グループの編成法をより詳しく指導することである。例えば、文章同士の連関性を確保する方法として澤田(1984)が挙げている9つの方法を事前に指導するのも一法であろう。

もう1つは編成したグループ同士を空間的に配置する作業により多くの時間をかけることである⁶。川喜田(2014)は空間的な配置を行ってはいじめてカード同士が「どのような意味で関係があるのか」を発見すると書いている。グループ同士を適切な空間に配置することは、グループ同士の関係を理解することにつながるのである。適切な空間配置を探して試行錯誤する過程で、グループ間のつながりについての理解が深まると考えられる。

(5) まとめ

パラグラフの構造を持った文章の書き方を指導するためにKJ法を用いた。KJ法を用いて編成した小グループを文章化することで、学生はパラグラフ構造をもった文章を書くことができた。またKJ法を用いてデータを整理することで文章が書きやすくなる効果があった。その理由としては小グループを編成することで書くべき内容が明確になったこと、およびグループ編成をする過程で行われた話し合いにより、各自の理解が深まり、情報の整理がなされたことが考えられた。

一方で指導時の課題も残った。パラグラフ間のつながりを明確にさせることができなかったことである。パラグラフ間の連関性を確保するためにはKJ法で中グループを編成する方法を指導しなくてはならない。また、グループ同士を空間的に配置する作業に時間をかけなくてはならない。

5 参考文献

川喜田二郎(2014)『発想法』中央公論新社
倉島保美(2012)『論理が伝わる 世界標準の「書く技術」「パラグラフ・ライティング」入門』講談社

澤田昭夫(1983)『論文のレトリック』講談社

近田政博(2013)「学術論文の書き方入門」の授業実践：文章作成に対する学生の苦手意識は軽減できるか。名古屋高等教育研究 第13号

渡辺哲司 & 島田康行.(2010). 大学初年次生が文章表現に対してもつ苦手意識の分析. 大学教育学会誌, 32(1), 108-113.

1 対応均衡構造によるつなぎとは、たとえば「一方、他方」といった接続詞を用いたつなぎをさす(澤田, 1984)。

2 川喜田(2014)によれば小グループを構成するカードの内容を文章化していく過程で起こる干渉作用には次の4種類がある。1つは文章化の過程で生じるヒント同士がお互いに矛盾して、共に没落して影が薄くなる場合、2つ目は干渉作用が発展しない場合、3つ目はいくつかのヒントが一致してその結果として安定性を獲得する場合、4つ目はいくつかのヒントが総合されて包括性を獲得し、成長していく場合である。

本稿の目的からは逸れるので本文では紹介しなかったが、川喜田はカード化→グループ編成→図解→文章化のサイクルを累積的に積み重ねる方法を紹介している。1サイクル目で書き上げた文章を読んで、その文章から抜け落ちてしまったヒントを見つけ、それらのヒントをカードを用いて採集し、同じサイクルを繰り返すのである。この方法を川喜田は累積的KJ法と呼んでいる。(p.133)

3 パラグラフは文から構成され、文は単語から構成される。文章を構成する最小単位は単語といえる。しかし本稿では内容面でのまとまりを重視し、パラグラフを内容的同一性を持つ最小単位とした。

4 後に行うグループ化作業を円滑に行うためには、グループメンバー全員が付箋に書かれた言葉について共通の理解を持っていることが望ましいからである。複数のメンバーが同じ言葉を書いている場合にも書き手によって意図が異なることがある。そのような場合に思い込みによるグループ化をさけるため、全員が自分の書いた言葉の意味を説明することとした。

- 5 TJC カード（TJC チケット）は地域の六号通り商店会で金券として使用できるチケットである。平成 22 年度より学生に配付をしている。本学の地域貢献の取り組みの一つとなっている。

- 6 空間配置を行う時間の確保の重要性と同時に、作業を行うためのスペースの確保の重要性も合わせて強調しておく。複数のカードを自由に移動させ、配置を考えるためには十分なスペースが必要である。複数の机を合わせ、荷物を片付けさせるなど、作業を行うための十分なスペースを確保しなくてはならない。